Ⅲ−13　［コラム］「つなプロ」に見る多様な主体との地域連携のあり方

中西 俊介

１．はじめに

京都府では、2017 年（平成 29）に京都府内の博物館・美術館等が地域の枠を越えてつながるネットワーク「京都府ミュージアムフォーラム」を設立し、連携して各館の有する課題の解決を図り、地域の活性化等に向けた取組を推進している。

2020 年（令和２）には、次世代向け事業として、「次世代と地域文化をつなぐミュージアムプロジェクト（通称つなプロ）」をスタートさせた。

2022 年（令和４）に実施した「つなプロ」の「京丹後モデル」は、京都府立大学と連携実施できた点で特徴的な取組となった。

以下、「つなプロ」及び「京丹後モデル」について紹介し、多様な主体が協働し活躍する地域連携のあり方について考えたい。

２．「つなプロ」について

「つなプロ」は、次世代を担う子どもたちが、ふるさとの宝物の魅力を再発見し広く発信することで、ふるさとへの愛着を深め、地域文化の継承を図ることを目的とした、ミュージアムと教育関係者、地域で活動する団体等が協力して実施するプロジェクトである。

３．「京丹後モデル」について

（１）取組内容

「京丹後モデル」に取り組むにあたり、はじめに京丹後市立丹後古代の里資料館（京丹後市教育委員会）に相談した。

丹後古代の里資料館からは、京丹後市では小中一貫教育モデルカリキュラム「丹後学」に取り組んでおり「つなプロ」と親和性があることと、京都府立大学が 2020 年から京丹後市立高龍小学校の校区で古墳等の調査活用を行っていることから連携してはどうかとの提案があった。

その後、高龍小学校及び京都府立大学に事業協力を快諾いただき、ミュージアム・小学校・大学が協力して高龍小学校５年生にふるさとの古墳の魅力を学習・体験・発信する活動の実施体制を整えた。

事前学習や大学生による体験授業を経て、子どもたち自らが発信者「RyuTuber」となり地域の古墳の魅力を紹介する動画の制作や地域住民に対する発表会を実施した。

（２）京都府立大学との連携

京都府立大学との連携は、「つなプロ」の学習・体験活動の質を高めるために大いに役立った。５年生は歴史の授業が始まっておらず、古墳の学習にどう意識づけさせるかが課題であっ

たが、大学生が子どもたちとの交流を大切にしながら、楽しく授業を実施してくれたことでスムーズに学びに入ることができた。加えて、多様な世代との交流が生み出されたこともよかった。このことは、地域に大学がなく大学生との交流機会を持ちにくい京丹後市において、地域の文化資源を通じた交流を創出する好事例にもなった。

（3）事業実施における課題

単発的な事業ではなくミュージアムをはじめとした関係者が一定期間、連携して取組を行うことで双方向の深い学びにつながることが「つなプロ」の特徴であり魅力でもあるが、高龍小学校や丹後古代の里資料館にとっては、日々の多くの業務を抱えた中での実施となり、初めてのことも多く、イメージの共有やスムーズな進行に係る事前準備など負担も大きかったと感じる。

「つなぐ、つながる」という言葉は昨今多用される批判の少ない綺麗な言葉だが、本来異なるものをつなごうとすると、どこかに負荷がかかるものである。「京丹後モデル」でも明確に分担を分けにくい作業などを引き受けて推進する馬力の重要性を感じることも多かった。

それは事務局を務める京都府も同様で、地域モデルだから地域の関係者任せにするのではなく、現場に足を運び、「つなぐ」ことの苦しさをともに引き受けなければチームは機能しないと感じた。「つなプロ」の理念をことあるごとに振り返り、伝えながらも、実施地域の特性や現状に合わせ柔軟に形を変えることを認め、欲張りすぎないことが持続可能な取組とする上で必要だと感じた。

4．おわりに

「つなプロ」で実施した地域モデルは 4 件になり、2023 年（令和 5）にはこれまでの活動をまとめた取組紹介 Book や探究学習に役立つ Work Book を発行するなど、取組の輪が広がりつつある（図 1・2）。

これまでに得たノウハウを活かしながら、さらに京都府域に取組を広げていくとともに、モデル地域で実施した取組がさらに発展していくようサポートを行い、次世代と地域文化をつなぐためにミュージアムを中心とした地域連携のあり方を探求していきたい。

図 1　『つなプロ取組紹介 Book
－令和 2 年度から令和 5 年度までの活動記録－』表紙

図 2　『つなプロ Work Book
－探究学習に役立つワークブック－』表紙

編集後記

2020 年に始まる「湯舟坂プロジェクト」は早くも 6 年目に突入している。教員生活のほとんどを久美浜に捧げてきたといえば大げさだが、府大に着任したのが 2018 年なので、私だけでなくたくさんの教え子がそれまで縁もゆかりもなかった久美浜に足繁く通ったことは確かである。3 回分の成果報告会資料集をまとめて一書にしようと、気軽な気持ちで本書の制作を思い至ったが、皆さんお忙しく、思いのほか難産だった。スケジュールに追われる中、献身的に編集作業を手伝ってくれた二人の大学院生には感謝してもしきれない。

なお、湯舟坂プロジェクト立ち上げ時から一緒に仕事をしてきた、菱田哲郎先生が今年度でご退職される。まだ隣の研究室には山積みの荷物があるので実感がわかないが、1994 年に開設した府大考古にとって最大の岐路であり、寂しい限りである。様々な仕事を通じて文化遺産の地域資源化の重要性を教えていただいた学恩に感謝するとともに、兵庫県と接する久美浜にこれからも足繁くお越しいただければと思う。（い）

表紙写真

上左　双龍環頭大刀調査風景（諫早直人撮影）

上中　第 2 回 ACTR 成果報告会風景（栗山雅夫撮影）

上右　「つなプロ」風景（諫早直人撮影）

下　湯舟坂 2 号墳出土双龍環頭大刀（栗山雅夫撮影）

裏表紙写真　湯舟坂 2 号墳全景（南西から。栗山雅夫撮影）

京都府立大学文化遺産叢書　第 33 集

地域資源としての湯舟坂 2 号墳

編　集　諫早 直人（京都府立大学文学部准教授）
発　行　京都府立大学文学部歴史学科
〒 606-8522　京都市左京区下鴨半木町 1-5
https://kpu-his.jp/
発 行 日　2025 年 3 月 6 日
印　　刷　北斗プリント
〒 606-8540　京都市左京区下鴨高木町 38-2